

# 『エルマーのぼうけん』の魅力

——「理想の大人像」の主人公と個性溢れる登場動物たち——

櫻井 美帆子

## I. はじめに

英語の読解力を上げるためには、沢山の英語で書かれた文章に触れて、英語に慣れることが一つの方法である。稿者は生徒に英語の本、新聞、雑誌を読むことを推奨している。しかし、一般的に自分の興味の無いものや難しすぎるものには手を出しにくく、読む習慣も持続しにくい。そこで、稿者は比較的抵抗なく取り組むことができる英語の児童書を最初の一步として、しばしば提言する。その中でも生徒に推薦することが多い作品は、内容が面白く、容易に読み進めることができる、『エルマーのぼうけん』<sup>1</sup> (*My Father's Dragon*) である。

『エルマーのぼうけん』は、『エルマーとりゅう』<sup>2</sup> (*Elmer and the Dragon*)、『エルマーと16びきのりゅう』<sup>3</sup> (*The Dragons of Blue-land*) からなる、ルース・スタイルス・ガネット (Ruth Stiles Gannett, 1923-) によって書かれた三部作の最初の作品である。本稿では、三部作すべてではなく、ニューヨークで1948年に出版された最初の作品である『エルマーのぼうけん』について内容紹介とともに分析し、その魅力を考える。この作品は、1948年「ニューヨーク・ヘラルド・トリビューン春の児童図書賞」に、翌年「ニューベリー賞佳作」に選ばれるほどの実力と技量が確かな作品である<sup>4</sup>。日本では1963年に翻訳されて以来、児童によって読み続けられ、また英語原書は、英語を勉強する中高生や大学生にとっては英文法や口語英語を理解するのに手に取りやすい、優れた作品である。

## II. 児童書としての魅力

『エルマーのぼうけん』の、カラフルな表紙、愛らしくわかりやすい地図、的確に場面を描写している挿絵は大変目を引く。そして、話の筋も面白く、スピーディーでワクワクさせる展開である。勇気ある主人公の少年の「エルマー」が、「どうぶつ島」に捕らわれている「りゅう」の話を「ねこ」から聞き、自分の力を頼りに「りゅう」を助けに行く冒険物語である。渋谷清視によると、子どもにとっての絵本の喜びは次のように分類される。「1. 日常生活体験との再会と共感 2. 主人公と体験をともにする楽しさ 3. 想像的世界を感情体験する喜び 4. 語りかけることばがもたらす快適感 5. 緊張と解放とユーモアにたいする期待 6. 未知の世界の認識への興味と感動 7. 美的表現にたいする共感と親愛の情」<sup>5</sup>

『エルマーのぼうけん』は、上記の全ての項目を網羅している素晴らしい作品である。親子の葛藤があり、意外な展開もあり、登場人物や動物の描写が卓越している。読者は、正義のために戦う「エルマー」に容易に共感し、感情移入することができ、数々の障害を乗り越えていく「エルマー」と共に、想像の世界での冒険を楽しむことができる。話の構図が理解しやすく、リズムカルに物語が進んでいくので心地よく読み進めることができる。姿こそ子どもだが、「理想の大人」像の「エルマー」、大人の醜さを象徴しているような「どうぶつたち」は、読者の子どもたちが行ったこともない、見知らぬ「ジャングル」にいる存在で、それぞれ興味を惹く。また、挿絵や地図の絵が緻密であり、表紙の色彩の鮮やかさは見るだけで良い刺激を与えてくれ、内容に関する期待感を大いにかき立ててくれる。一貫して「善」の象徴の「エルマー」と、「悪」の象徴である「どうぶつ島」の動物たちの間で、読者である子どもたちへ正しい倫理観を示し、未来への夢や希望を育む可能性が大きい作品である。

## III. 『エルマーのぼうけん』の主な登場人物たちの特徴と魅力

### 1. 主人公「エルマー」

多くの児童文学は、子どもが危機に面し、失敗と成功を繰り返しながら精神的に成長していく様子を描く。「エ

ルマー」も窮地に何度も陥るが、その度に彼に備わった才能を駆使し、なんとか切り抜けて成長していく。その「エルマー」の力量や性格を考える。

### 1) 慈悲の心

「エルマー」は、親切で温かい心を持つ。か弱い子猫が悲しげに鳴いていたのではなく、「ととったのらねこ」が、ただ調子が悪そうだからという理由で家に招待する。「エルマー」は相手の姿形にとらわれず、弱者を助ける心を持つ。この情の深い心で救われた「ねこ」が、後に「エルマー」の冒険を助けてくれ、夢をかなえてくれる手伝いをしてくれる。ここで読者に慈悲の心が大切だということを伝えている。

### 2) 礼儀正しさ

「エルマー」の礼儀正しさは、たびたび「エルマー」の運命を良い方向に導く。「ねこ」に自分の母親の言動を謝り、「どうぶつ島」へ渡る際に踏んでしまった、ぐっすり寝ている「くじら」にも謝り、「どうぶつたち」に食べられそうになっても次のような丁寧な言葉遣いで受け答えをする。「どうぞライオンさま、ぼくをたべるまえに、どうして、そんなに、とくべつおこっているのかおしえてください」<sup>6</sup>と言う。この作品では人間と動物の間に分離(divide)がなく描写されているが、人間社会では、相手が礼儀正しいと、むやみに怒りをぶつけられないことが多い。一貫して「エルマー」の言葉遣いは丁寧である。このような丁寧な受け答えや礼儀正しさには価値がある。

### 3) 行動力、計画力、体力

「エルマー」は、「ねこ」の世話をこっそり3週間もする。世話をしていることが見つかってしまい、「ねこ」は追い出され、「エルマー」はむちで打たれて叱られる。しかし度胸のある「エルマー」は、再び「ねこ」に会うために家を抜け出す。「エルマー」の行動力は、旅を決断したその日に船を探しに行くこと、一緒に行けない「ねこ」を置いて1人で出かけたこと、旅の途中6日6晩船底に隠れていたこと、空の麦袋に隠れて「みかん島」に上陸したことにも表れる。「エルマー」は「ねこ」に様々な「どうぶつ島」のことを聞き、「りゅう」を助けに行く計画をたて、準備をする。

「エルマー」は体力にも優れている。「みかん島」から「どうぶつ島」に、みかんを31個も含む重い荷物を背負い、暗い夜の海上の岩を7時間かけて飛び移りながら渡る。時速3kmで進めば21km、時速2kmでも14km、瀬戸内海の明石海峡は最狭部約3.6km、東京駅から川崎駅は直線で約17.7km<sup>7</sup>であることを考えると、どんなに長い距離かが分かる。「エルマー」は、それを難なくこなし、上陸後もみかんを8個食べた後、川を探しに歩き続ける。行動力、計画力、体力がないと冒険は上手く運ばないことを読者は察することができる。

### 4) 決断力、判断力、洞察力

物事を瞬時に決断する能力や冷静に判断する力があることは素晴らしい。「エルマー」は、「ねこ」が捕らわれている「りゅう」を助けることを提案すると、即座に「うん、やってみるとも」<sup>8</sup>と返答する決断力がある。「エルマー」は、漁師から「どうぶつ島」から誰も生きて帰ってこなかったことを、震えながら話されても平気である。この平常心は危機に瀕したときに「エルマー」を救う。

「エルマー」は知力に優れており、疲労しても判断力は衰えない。「川は、うみの中へながれこんでいるはずだから、かいがんをずっとあるいていけば、きっと川がみつかるにちがいない」<sup>9</sup>と考え、歩き続けるところにもそれが示されている。

「エルマー」は気転もきく。「エルマー」は、2匹の「かめ」に、背中に背負っているリュックサックのことを、病気のおばあさんと訊かれたので、「そうとも」<sup>10</sup>と即座に答え、「いのしし」が、「エルマー」が捨てていたみかんの皮を見付け、その存在に疑問を持っているのを偶然に知ると、以後「エルマー」は捨てるのをやめる。空腹時も食べる量を自分で調整するほど思慮深く、後に役立つと思われる「チューインガム」や「ぼうつきキャンデー」には手をつけない。「どうぶつたち」に捕まっても、用意していた道具や食べ物を即座に利用して窮地から脱出する。「エルマー」は現状を把握し先を見通す洞察力のある子どもとして描かれている。

「りゅう」を繋いである綱を切るときも、「りゅう」が泣きそうになり、せかしていても、相手を落ち着かせるとともに、自分の仕事に集中し、同時に上手くいかなかった時の対策も考えることができるほど内面が成熟して、それは次のような場面でも示されている。

「じっと、じっと、してるんだよ。いい子だから。まにあうとも。じっとして、たってておくれよ。」…「じっとしてるとんだよ。」…「もし、ぜんぶきれなかったら」…「川のはんたいがわにとんでって、そこで、つなののこりをきろうよ。」<sup>11</sup>

「エルマー」は子どもの姿をしてはいるが、実は幼い読者たちが、大人になったらこのようになりたいと思う「理想の大人像」を示している。これがこの作品の中心にある考え方である。

## 2. 「りゅう」

### 1) 表層的（「弱者」であるドラゴン）

「りゅう」が登場する場面は少ない。「ねこ」の話の中を除いて、「りゅう」が出てくるのは最後の数ページにすぎない。作者ガネットは次のように述べている。

りゅうはまだ子どもだから、かわいくて、おとなしくて、やさしそうに見えるのがいいっていったの。強そうに見えるよりも、やさしそうに見えるりゅうのほうが、お話を読む子どもたちも、助けてあげたいっていう気持ちになろうと思ったから。<sup>12</sup>

「りゅう」の、子どもっぽく丸みを帯びた愛らしい体形は挿絵からも認識でき、「大きなくろくまぐらい」「ながいしっぽをしていて、からだにはきいろと、そらいろのしま」「つのと、目と、足のうらは、目のさめるような赤」「はねは黄色」の描写から、「りゅう」の大きさや色鮮やかで美しい外見が想像可能である<sup>13</sup>。一般的な物語に現れる「りゅう」は、通常は本作よりもっと恐ろしく大きな形をしていることが多い。例えば、『ゲド戦記』(A Wizard of Earthsea 1968)の「竜」は巨大で、「人間の腕ほどもある銅のような爪。からだをおおういしのように固いうろこ」「突然、ごうと音がして、竜の口から真っ赤な炎が噴き出した」とおどろおどろしい<sup>14</sup>。しかし、『エルマーのぼうけん』の「りゅう」は、心優しい竜である。このような性質の竜は他の児童文学作品にも見られる。『ドラゴンが教室にやってきた!』<sup>15</sup> (A Dragon in Class 4 1984) や『のんきなりゅう』<sup>16</sup> (The Reluctant Dragon 1898) の竜は、こどもたちと友だちになり、楽しく一緒に過ごすことができる生き物として描写されている。

『エルマーのぼうけん』の子どもの「りゅう」は竜なのだが、子どもなので「どうぶつたち」と戦うこともできず、1日中働かされ、文句を言えば羽をねじられたり、体を叩かれたりする。これについて、福永英彦は、

このかわいそうなりゅうの生々しい姿とどうぶつたちの容赦のなさが、この作品に異様な迫力と魅力をもたらしているのに違いない。そしてここに、作者ガネットのアメリカ児童労働についての、また児童労働の規制をめぐる長年にわたる挑戦とその挫折への深い思いを読み取れるのではないだろうか。<sup>17</sup>

と述べ、児童労働の象徴としてこの「りゅう」をみている。

実際、社会では、児童労働者のように不当に虐げられる弱者がいる。弱者を助けようとする者は、いくつもの困難を乗り越えていく必要がある。弱者を助けるという行動は正義であるから、児童文学では主人公が弱者のために戦い、困難に打ち勝つ必要がある。『エルマーのぼうけん』においては、子どもたちにとってこういう人間になりたいという「理想の大人」像である「エルマー」は、「弱者」である子どもの「りゅう」を助けることに成功しなければならなかった、と稿者は考える。その成功という結末により、幼い読者は、いずれ突入する未知の大人社会に対して夢や希望を育むことができ、正しい行為が報われるという倫理観も養われる。

## 2) 深層的（「強者」であるドラゴン）

本書の原タイトルは『私の父のドラゴン』である。「ドラゴン（竜）」は、世界各地での伝説上の動物であるが、特に強い者の象徴である。十字軍の時代には、キリスト教徒に敵対するイスラム教徒を示すものとされ、そこから、「聖ゲオルク（ゲオルギウス）とドラゴン」というイメージが始まったとされる<sup>18</sup>。この物語では、「どうぶつたち」によって捕らわれの身となり、酷使されている「ドラゴン」であるが、深層的には実は「ドラゴン」は強者の象徴のはずだ。主人公の「エルマー」は、少年であったが、それほどの、一般的には強者とみなされる「ドラゴン」を解放し、それによって空を飛びたいという自分の夢を実現させる。窮地に陥っている「強者」を助けるという事実が、強者より強い存在として、「エルマー」の偉大さを引き立てている。そのために冒険が語られているので、「りゅう」の役割は極めて大きい。つまり、この作品の「りゅう」の解放には重層的な意味がある。

## 3. 「ねこ」

「エルマー」に拾われる年を取った「ねこ」は、「エルマー」が「りゅう」を助け出す冒険への扉としての役割を果たしている。「ねこ」は空を飛びたいと言う「エルマー」の夢を聞き、その夢を叶えることに繋がる「りゅう」の話をする。「ねこ」は、支配的で抑圧的な母親に立ち向かう「エルマー」の言動から、その強い精神、行動力を見て取る。「エルマー」の未来の可能性を信じ、励まし、的確な助言を与える経験豊富な指導者が「ねこ」である。平居謙は、『エルマーのぼうけん』を「観光」の視点から読み、この「ねこ」を隣人、導者としての老人、情報提供者、語り部の役割を果たしていると考えている<sup>19</sup>。読者である子どもたちは、自分が夢を持ち、その夢を熱く語ったとき、周囲にはその意志を信じて応援してくれる人が出てくる可能性を、この「ねこ」の存在から感じ、夢を持つことの有意義さを知る、と稿者は考える。

また、「ねこ」は「エルマー」の旅には同行しないが、入念な準備を手伝い、詳細な情報を与えることで、最終的に冒険を成功に導く。「エルマー」は、「ねこ」と一緒に準備した多様な食べ物や道具と「ねこ」から得た「どうぶつ島」の知識によって、幾度とくる絶体絶命の場面をなんとか乗り切ることが出来る。読者はこの準備と成功から、行動を起こす前には、事前の入念な準備が肝心であることを知る。

## 4. 「どうぶつ島」の「どうぶつたち」

「ジャングル」には様々な「どうぶつたち」がいて、奇妙な行動もしており、読者には新鮮な印象を与えるが、「どうぶつ島」は人間社会の縮図にほかならない。

大人の視点から見ると、「エルマー」が与えた「チューインガム」を噛むことに夢中になり、「エルマー」を食べることを忘れる「とらたち」の描写は、現実における電車の中でもスマートフォンやゲームに熱中しすぎて礼節を忘れる人たちのようである。年を取り、体中が汚くなってしまったと泣く「さい」の描写は、現実においては、過去の栄光にすがり、現在の自分を哀れみ日々を過ごす老人の雰囲気がある。「ライオン」は、いつまでも親の影響下から逃げられない未熟な大人にみえる。この「ライオン」の母親の「めすのライオン」は、自分の外見のことばかり気にして、他の大事なことに気が付かない大人のものである。「ゴリラ」は、怒鳴れば他人は萎縮して自分に従うと考えている傲慢な大人の喩えである。「ぼうつきキャンデー」に気をとられ、「エルマー」の橋になってしまう「わにたち」の描写は、現実では欲望に目がくらみ、自分の浅はかな行為が後にどのような結果をもたらすかの判断ができない自分勝手な大人のものである。みかんがならない「どうぶつ島」にみかんの皮があるという異常さに気が付きながらも、行動を起こさない「いのしし」の描写は、現実においては、現実逃避の性格のせいで状況を更に悪化させてしまう大人の比喩と考えられる。

この作品では、「どうぶつたち」は「りゅう」を助けに行く「エルマー」の障害物であり、「悪」なのであるが、彼らの言動はどこか滑稽で心底からは憎めない。その言動は時に笑いを誘ってしまうほど、読者を楽します。このような登場人物がいることが、この児童作品を秀逸な作品とする1つの要因となる。

## 5. 「ねずみ」

「どうぶつ島」では、ほとんどの動物が「エルマー」に接した際に彼の礼儀正しさに調子を狂わされ、話してい

るうちに懐柔されてしまうのだが、「ねずみ」は「エルマー」とは直接話すことはなく、丸め込まれることもない。いち早く「ねずみ」は、「エルマー」が「どうぶつ島」に上陸したことに気が付き、警戒を続けるという、「どうぶつたち」の中では、危険時において適切な行動をとることができる存在である。しかし、「いのしし」に侵入者の存在を報告しても信用されないのは、日常的な信頼度が低いためである。この「ねずみ」の、あわてんぼうの性格はセリフにも表れている。眠っている「エルマー」の姿を見て岩だと思い込んでしまい、次のように言う。

「こりゃ こりゃ なんと かわいい おかしなこと！おっと、まちがい。おやおや、なんと、おかしな、小さいいわだこと。」…「はなしに、だれかしなくっちゃ。おっと、まちがい。だれかに、はなしをしなくっちゃ。」<sup>20</sup>

この場面で読者はやや緊張するが、「エルマー」が気づかれなかったことに安堵し、また、「ねずみ」の話し方に笑いを誘われる。次に「ねずみ」が登場する場面では、「いのしし」の「しんにゅうなんて、おれは、きらいだぞ」に対し、「やたしも、わだや」「おっと、まちがい。わたしも、やだわ」と「ねずみ」は言い間違ふ<sup>21</sup>。

この作品においては、「りゅう」対「どうぶつ島のどうぶつ」は「弱者」対「強者」、「こども」と「大人」といった対立の関係が成り立っている。従って、この作品の「ねずみ」は、「ちっぽけなまえ足」をしてはいるが、「大人」だと推測され、毎回言い間違いをしているので、せっかちで落ち着きのない性格だと見て取れる。福永は、「どうぶつたちには、人間悪がユーモラスに、そして鋭く描かれている」と述べ、さらにこの「ねずみ」の性格について「諜報員のようであるが、いつも不安気で、慌てており、小心である」<sup>22</sup>と分析している。

「エルマー」が「りゅう」を助け、一緒に「どうぶつ島」から脱出する緊迫した終わりの場面で、最後のセリフを言うのがこの「ねずみ」である。「どもれ！どもれ！うりゅうが、ようひつだ！うりゅうが、ようひつだ！おっと、まちがい。もどれ！りゅうがひつようだ！」<sup>23</sup>。「りゅう」をこき使っていた「どうぶつたち」は、彼らにとって便利な「道具」を「エルマー」に奪われて怒り狂う。「どうぶつ島」の「どうぶつたち」のさもしい心情がこの「ねずみ」のセリフに凝縮されている。福永は、

我われは、立場に違いはあれ、自分に都合よく役立つものにはあくまでも固執するのかもしれない。それが自分の支配の及ぶ限り、自分の大事な子どもであろうが手放すことができない。自己の欲望の前には弱い物の犠牲はいとわない、それが手段であればなおさらだ。そうした本質を否定できないのかもしれない。凶暴などうぶつたちの言葉の中で、ほんとうの怖さは、この小さなねずみのつぶやく小さなセリフにあるのではないだろうか。<sup>24</sup>

と分析し、「ねずみ」の言葉を重視している。

このように深い意味を含む最後の場面であるが、ここで「ねずみ」が言い間違えることにより、「どうぶつたち」の悪意が和らぎ、後味が悪くならない結末となっている。そして、この言い間違いによって場面が和むことにより、読者は非情な「どうぶつたち」の悪意のある焦燥ではなく、「エルマー」と「りゅう」の旅立ちの方を想像して物語の余韻に浸ることができる。「余韻」とは、「作品という生き物が読んだ人に移っている状態、その作品世界に生きているものが読者の心に影を落とす状態」<sup>25</sup>である。「りゅう」を助け出した「エルマー」はどこに飛んで行くのか、家に帰るのか、「りゅう」と次の冒険が待っているのか、などと読者はしばしばその後の想像の世界を楽しむ。児童書は、子どもに恐怖や不安を与えるものではなく、爽快感、面白さと共に未来への希望を与えるべきものなので、この作品において「ねずみ」によってもたらされるプラスの「余韻」は意味深い。

#### IV. おわりに

『エルマーのぼうけん』では、人間と動物が同じレベルで語られている。動物は、ここではもとより人間と同じ存在として考えられている。人間相互の関係を示すときに、動物を介入させることによって、子どもたちに親しみを感じさせようとするものであり、この手法は仏教説話や民話など、いたるところで用いられてきたものであ

るが、この作品では、特に子どもたちという読者対象を意識して構想されたと考えられる。本作品は、人間と動物との関係を通し、実は人間社会の中で親切、正義、勇気などがいかに重要なのかを子どもたちが学ぶことを想定している。

本作品に登場する人間も動物も、根本的には優しい存在である。動物たちの殺し合いの場面もなく、動物たちは恐ろしそうに見えるが、主人公の少年の話を聞き、納得もする。そのように「優しさ」を原理として語られたこの作品は、読者である子どもたちの精神状態に知らず知らずの間により影響を与える可能性を内蔵している。この作品を分析し、様々な魅力に触れ、解説することによって、その可能性の一滴が示されたと考えられる。

また、英語を勉強する生徒たちにとっては、まずは本作品のような、内容に優れており英語も理解しやすい児童書を原書で読み、文学を楽しみながら、書かれた英語に慣れ親しんで欲しい。そして徐々に、さらに難しい英語の原書や新聞等の活字に多く触れ、英語の読解力を高めることは、彼らの人生にとって非常に有益であると感じる。

#### 注

1. ルース・スタイルス・ガネット『エルマーのぼうけん』渡辺茂男訳、新版、東京：福音館、2009年。
2. ルース・スタイルス・ガネット『エルマーとりゅう』渡辺茂男訳、新版、東京：福音館、2006年。
3. ルース・スタイルス・ガネット『エルマーと16ぴきのりゅう』渡辺茂男訳、新版、東京：福音館、2006年。
4. 前沢明枝『「エルマーのぼうけん」をかいた女性 ルース・S・ガネット』東京：福音館、2015年、174頁。
5. 渋谷清視「子どもにとって絵本とは何か」、日本子どもの本研究会編著『子どもと絵本の学校』東京：ほるぷ出版、1988年、351～352頁。
6. ルース・スタイルス・ガネット『エルマーのぼうけん』、76頁。
7. Google. com.. Google Maps. accessed September 24, 2016, <https://www.google.co.jp/maps/>
8. ルース・スタイルス・ガネット『エルマーのぼうけん』、17頁。
9. 同前、36頁。
10. 同前、40頁。
11. 同前、108～110頁。
12. 前沢明枝『「エルマーのぼうけん」をかいた女性 ルース・S・ガネット』、128頁。
13. ルース・スタイルス・ガネット『エルマーのぼうけん』、13～15頁。
14. アーシュラ・K. ル＝グウィン『ゲド戦記I 影との戦い』清水真砂子訳、東京：岩波、2006年、155頁。
15. ジューン・カウンスル『ドラゴンが教室にやってきた！』こだまともこ訳、東京：日本標準、2010年。
16. ケネス・グレアム『のんきなりゅう』中川千尋訳、新版、東京：徳間書店、2006年。
17. 福永英彦『「エルマーの冒険」とアメリカ児童労働規則の歴史』、平居謙編著『「エルマーの冒険」に学ぶ観光』、名古屋：樹林舎、2014年、208頁。
18. 植田重雄『守護聖者一人になれなかった神々』東京：中央公論社、1991年、36頁。
19. 平居謙「ねことエルマーとりゅう—主要キャラクターたちの意味するところ」、平居謙編著『「エルマーの冒険」に学ぶ観光』、名古屋：樹林舎、2014：年、140～144頁。
20. ルース・スタイルス・ガネット『エルマーのぼうけん』、37～38頁。
21. 同前、62頁。
22. 福永英彦『「エルマーの冒険」とアメリカ児童労働規則の歴史』、221頁。
23. ルース・スタイルス・ガネット『エルマーのぼうけん』、115頁。
24. 福永英彦『「エルマーの冒険」とアメリカ児童労働規則の歴史』、223頁。
25. 木村裕一『きむら式童話のつくり方』、東京：講談社、2004年、53頁。

#### 参考文献

- Counsel, June. *A Dragon in Class 4*. London: Fiber and Faber, 1984.  
 Gannett, Ruth Stiles. *My Father's Dragon*. New York: Random, 1987.  
 ——. *Elmer and the Dragon*. New York: Random, 1987.

- . *The Dragons of Blueland*. New York: Random, 1987.
- Grahame, Kenneth. *The Reluctant Dragon*. Abr. ed. (London 1898) London: Walker, 2004.
- Google. com.. Google Maps. accessed September 24, 2016, <https://www.google.co.jp/maps/>
- Meyer, Paul George. et al. *Synchronic English Linguistics: An Introduction*. Tubingen: Gunter, 2002.
- 植田重雄『守護聖者一人になれなかった神々』東京：中央公論社、1991年。
- カウンスル、ジューン『ドラゴンが教室にやってきた！』(June Counsel. *A Dragon in Class 4*. London, 1984) こだまともこ訳、東京：日本標準、2010年。
- 角川書店編『今昔物語集』30版、東京：角川書店、2016年。
- ガネット、ルース スタイルス『エルマーのぼうけん』(Ruth S. Gannett. *My Father's Dragon*. New York, 1948) 渡辺茂男訳、新版、東京：福音館、2009年。
- ガネット、ルース スタイルス『エルマーとりゅう』(Ruth S. Gannett. *Elmer and the Dragon*. New York, 1950) 渡辺茂男訳、新版、東京：福音館、2006年。
- ガネット、ルース スタイルス『エルマーと16ぴきのりゅう』(Ruth S. Gannett. *The Dragons of Blueland*. New York, 1951) 渡辺茂男訳、新版、東京：福音館、2006年。
- 木村裕一『きむら式童話のつくり方』東京：講談社、2004年。
- グレアム、ケネス『のんきなりゅう』(Kenneth Grahame. *The Reluctant Dragon*. London, 2004) 中川千尋訳、東京：徳間書店、2006年。
- 渋谷清視「子どもにとって絵本とは何か」、日本子どもの本研究会編著『子どもと絵本の学校』東京：ほるぷ出版、1988年、341～356頁。
- 平居謙「ねことエルマーとりゅうー主要キャラクターたちの意味するところ」、平居謙編『「エルマーの冒険」に学ぶ観光』名古屋：樹林舎、2014年、139～164頁。
- 福永英彦『「エルマーの冒険」とアメリカ児童労働規則の歴史』、平居謙編著『「エルマーの冒険」に学ぶ観光』名古屋：樹林舎、2014年、207～224頁。
- 前沢明枝『「エルマーのぼうけん」をかいた女性 ルース・S・ガネット』、東京：福音館、2015年。
- ル＝グウィン、アーシュラ・K『ゲド戦記 I 影との戦い』(Le Guin, Ursula K. *A Wizard of Earthsea*. Berkely, 2009) 清水真砂子訳、東京：岩波、2006年。
- 柳田国男『日本の昔話』東京：新潮社、2012年。